氏　　名　若見理江（わかみりえ）
学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　文博第381号
学位授与の日付　平成19年1月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　文学研究科思想文化学専攻
学位論文題目　ハイデガーの存在の問いと現象学

論文調査委員　（主査）教授 氣多雅子　教授 片柳榮一　助教授 杉村靖彦

論文内容の要旨

本論文は，ハイデガーが「存在の問い」という仕方で考えていたことを，この問いを導くために用いられている現象学的方法を解明することによって明らかにし，ハイデガーの存在の問いとフッサールの現象学との間に密接な連関を見出すということを，目的としている。

まず第１章では，ハイデガーが1919年の講義「哲学の理念と世界観問題」で提示した根本学（Urwissenschaft）としての哲学の理念について考察する。ハイデガーは，フッサールと同様に，学的哲学を世界観の哲学から区別し，学的哲学の立場を支持した。しかし，フッサールが相対主義や懐疑主義を導く歴史主義を退けて，学的哲学によって絶対的に妥当する規範をめざしたのに対して，ハイデガーは歴史的なもの，時間的なものを重視した。ハイデガーは，むしろ絶対的妥当や普遍妥当性を前提することが相対主義や懐疑主義を生み出す原因であると見なし，このような対立を見直すことが必要であると考えた。歴史的なものや時間的なものと規範的なものや超時間的なものとの対立を克服するために，彼が考え出した方法が「形式的告示」である。

第２章では，この形式的告示の形成過程が論じられる。この方法を形成するにあたって，ハイデガーはフッサールの「形相的還元」や「偶因的表現」の分析を参考にしている。ハイデガーは，動機づけの過程を終結しない形式的理論化によって，類的に普遍化される「意味」ではない，各々の「私」にとっての個別的な「意味」を取り出そうとする。フッサールの形相的還元が個別的なものを捨象するのに対して，ハイデガーの形式的告示においては，個別的なものこそが重視される。ハイデガーは，形式的な側面において共通のものを表し，この側面を各自に遂行させることによって，各自の側で個別的な意味を表現しようとしたのであり，フッサールが「偶因的表現」と呼んだ言葉がもつそのつどの話し手や聞き手を指す働きを，「世界」などの他のさまざまな言葉においても表そうとしたのである。

形式的告示は「関係意味」「内実意味」「遂行意味」の三つの意味方向から成っており，内実的なものを未規定にして，問いの方向だけを指し示す方法である。ハイデガーはフッサールの志向性を捉え直すことによって，この方法を形成した。「内実意味」はノエマ的側面に，「関係意味」はノエシス的側面に，また「関係意味」に即して遂行される「遂行意味」もまたノエシス的側面にあたる。「関係意味」は「気遣うこと」とも言われ，この意味は『存在と時間』での「気遣い」または「世界‐内‐存在」に展開されていくのである。そして「内実意味」は「世界」を表しており，「気遣い」ないし「世界‐内‐存在」という形式を遂行することによって，この問いを問う者の側でそれぞれの個別的な意味が表現されることになるのである。

この形式的告示が指し示すのは，事実的生のなかに世界の自明性に抵抗する契機を見出し，これを事実的生そのものから引き出すという試みであり，それが現象学的解釈学である。第３章では，現象学的解釈学形成の過程が，明らかにされる。

ハイデガーにとって，志向性はノエシスがノエマに向かうという一方的な方向だけでなく，自らが規定したことによって規定され返すという仕方が属している。この関係には終りがなく，自分自身の指示によって自己自身が巻き込まれていくと

いう可能性が伏在しているのであり，ハイデガーはこのような志向性の動性を「転落性」と名づけた。これは後に「頽落」と呼ばれることになるもので，ハイデガーは現象学的解釈に転落性という動性に対抗する運動を見出したのである。志向性にこのようなあり方が属しているからこそ，「現象学」は「解釈学」という側面をもつ。ハイデガーはフッサールの「動機づけ－傾向」の分析から「先－構造」を展開させていったのであり，「反省」ということを解釈学的に遂行しようとしたのである。

「先－構造」は「先持」「先視」「先把握」の三つの契機から成る。「先持」は「理解」において予め持たれているものであり，ここから「先視」が問いの照準を定め，だいたいの枠組み，即ち「先把握」から「として」という「解釈」の働きによって「意味」が汲み取られるのである。この「先－構造」は，現存在一般にそなわる働きであるだけでなく，『存在と時間』という学的解釈の「先－構造」でもある。ハイデガーは『存在と時間』という学的解釈によって現存在に自分自身を解釈させ，それによって現存在の存在理解を導いて，「存在の意味」へ至ろうとする。

さて，「世界－内－存在」は統一的な構造であるが，三つの観点に，即ち「世界の内に」「世界－内－存在」「内－存在そのもの」に分けることができる。ハイデガーは「世界－内－存在」を説明する際，「断片」や「契機」という言葉を使っており，フッサールの「部分と全体の理論」を応用していることが見て取れる。そして「存在理解」はフッサールの「カテゴリー的直観」をもとにしており，「形式的告示」にそなわる「禁止的」な機能によって，「存在の問い」において非本質的な契機を排除しながら，この問いのために不可欠な契機を提示していくことによって「存在の意味」をめざしていくのである。

第４章で，ハイデガーの存在論と現象学の内属的な関係がさらに明らかにされる。『存在と時間』は，その第３章で，道具との関わり（配慮），第４章で，他の人々との関わり（顧慮）を解釈の「として」によって現存在の前存在論的な理解から概念的に把握させた後，第５章の，例えば第32節「理解と解釈」では，ふだんは自覚せずに行っている「理解と解釈」というあり方を解釈によって明示し理解させた上で，第6章で，配慮と顧慮を包括する「気遣い」というあり方を，即ち「世界－内－存在」の全体を明らかにしている。

このようにして『存在と時間』では，「関係意味」としての「世界－内－存在」に即して問いを遂行することそのものである「遂行意味」が働くことによって，最初は「空虚」であった「実存の理念」および「存在一般の理念」が次第に充実されていくという仕方で「存在の問い」が問われているのであり，「形式的告示」は表立たないながらも重要な役割を果たしているのである。

また，従来ハイデガーの哲学は倫理が欠けているとして批判されてきたが，その批判が当て嵌まらないことが第５章で明らかにされる。ハイデガーが存在論ということで，倫理的なありようを現存在のあり方として統一的に問おうとしていたこと，本来的なありようを要求するためにはそこへ到達するための問いの過程が重要だと考えていたことが，考慮されねばならない。ハイデガーは「形式的告示」という方法を通じて，現存在を「不安」や「死」に向かわせ，「良心」や「負い目」の意味を明らかにし，自己の存在に責任をもったあり方を示すのであり，こうして「私はある」という最も個別化された様態が現存在自身に開示されることになる。ハイデガーはこの「私はある」という形式的な側面にカントの倫理学との共通点を見出し，「普遍妥当的なもの」を見て取るのである。

このようにして，ハイデガーはフッサールの理論的なものの優位に基づく理論的なロゴスの学を，「その他の領域（倫理的，美的，宗教的）」をも統一的に問おうとする「現象学的存在論」へと展開させたわけであるが，一般には，「現象学的存在論」という問題設定とフッサールの「超越論的現象学」という問題設定とは異なっているように受け取られている。第6章では，ハイデガーの「存在論」が超越論的なモチーフを排除しないこと，さらにはハイデガーが「超越論的主観性（純粋意識）」を批判しつつも受け入れていることが，示される。

ハイデガーは「意識と実在性との存在の区別」を開示するフッサールの現象学的還元に，存在の問いに対する答えを見出していたのであるが，ハイデガーにとって，フッサールの還元によってはこの区別を区別として問うことができなかった。ハイデガーは「意識と実在性」の区別を「実存と実在性」の区別として捉え直す。ハイデガーは「現存在」という言葉を二通りの意味で用いている。一つは実存する者としての存在者という意味であり，もう一つはいまだ実存していない全体としての現存在である。ハイデガーはフッサールの「事実的自我」と「超越論的自我（主観性）」との区別を「存在者としての現存在」と「あり方そのものとしての現存在（現存在の存在）」の区別として捉えた。いまだ実存しているとはいえない現

存在は，自らをそのつど存在者として送り出している。ハイデガーは『存在と時間』で，実存する者としての現存在に存在と存在者との区別を遂行させ，この現存在に全体としての現存在を明らかにしていくことを試みている。

フッサールにおいて「世界」は超越論的主観性によって「構成されたもの」を意味していたが，フッサールも後に「世界」は超越論的主観性に先立って地平として存在していると考えるようになった。実在するものはこの「世界」という形式に基づいてのみ現れるのであり，このような意味で「世界」とは「絶対的自立性」である。そしてハイデガーもまた「自立性」という言葉を「気遣いの自立性」という意味で使っているが，このことは「世界－内－存在」というあり方をもつ存在者が自らのありようを引き受けるようになることを意味している。

気遣いの自立性とは「先駆的決意性」のことであり，気遣いの「自己に－先立って」という契機に注目することによって，現存在は自立性へと至る。この「自己に－先立って」という契機とフッサールが晩年に言及しだす超越論的主観性の「先－存在」というあり方に共通点を見出すことができる。フッサールは『イデーン』で区別していたような「事実」と「本質」の根底に「原事実」という次元を見出した。つまり，自我は自己に先立って自らに関わらされているのであり，フッサールは，それ自身は存在しているとはいえないが自己に先立って自らを存在者として送り出すありようを「先－存在」と呼んだのである。

ハイデガーにおいて「先」とは時間性の「将来」を意味しており，また「アプリオリ」は「時間」を意味している。ハイデガーは，現存在に自己自身の存在理解を解釈させることによって，この現存在のいつものあらゆる態度を規定している「自己に－先立って」という次元に現存在を向かわせるのであり，ここにおいて現存在は初めて本来的に自己自身へと向かう，即ち「実存」の現象へと至るのである。このことは，いわば「反省的」なありようを意味しており，現存在を根底において規定している存在と存在者の区別が，現存在自身によって表明的に遂行されたとき，この区別は「存在論的差異」と呼ばれるのである。

以上の論考を踏まえて，第7章では，1919年講義における「根本学としての哲学の理念」がその後どのように展開されていったかを，改めて考察する。ハイデガーは『存在と時間』以後，初期フライブルク時代に論じていた学的哲学と世界観の哲学との区別，および哲学や学，世界観の規定を再び扱うようになる。ハイデガーにとって哲学とは一貫して，対象を外から考察することや倫理的規範を後から応用することではなく，実存の遂行としての哲学することそのものを意味していた。哲学は決して世界観や学ではありえないが，しかし世界観や学と関係をもつ。ハイデガーは「超越」に世界観と哲学の両方の側面を見出す。

「超越」とは，フッサールにおけるような志向性のノエシス－ノエマ的構造を可能にしているあり方であり，後にフッサールが考察するようになる受動的志向性の側面をも合わせもつ。このような超越としての志向性によって，現存在は生まれたてであっても既にある一定の仕方で方向づけられており，ある一つの世界の内に自己を見出すことになる。このように各々の自己を既にさまざまに規定している世界観から現れ出て，これらの世界観の根本を持ち堪えるようになる態度が「哲学的世界観」である。この哲学的世界観は，何らかの出来合いの世界観を提供することとは明確に区別されるのであり，そしてまた諸学は，哲学的世界観に由来し哲学的世界観によって担われるのである。

ハイデガーはナチズムをこのような哲学的世界観という意味で捉えた。つまり，「無性」という「支えがない状態」のなかでそのつど「決意性」によって自己を規定し自己を持ち堪え，「民族」という自らの「歴史性」を引き受ける態度として捉えたのである。ハイデガーの「存在の問い」には第一次世界大戦の経験が大きく関わっていたのであり，「存在への問い」とは正しく理解された意味において「人間への問い」そのものであったのである。

ハイデガーにおける「民族」とは，超越論的なあり方を意味しているのだが，ハイデガーはこのような私たちのあり方に過大な期待をし，そしてこのことがナチズムを真の運動と見なすことにも繋がっていった。しかし，ハイデガーの「存在の問い」には，このような私たちの歴史的なあり方を問い直す意味も含まれているのであって，ハイデガーが「民族」と呼ぶような私たちのあり方を無意味なものとして単純に切り捨ててしまうことはできないであろう。

またハイデガーは1930年頃から，「超越論的」や「超越」という言葉を避けるようになるが，現象学そのものを放棄したわけではない。『哲学への寄与』における性起の思索と現象学について，第8章で考察する。『哲学への寄与』で扱われている第一の始元（形而上学）の歴史とは，志向的なあり方によって自らが立てる表象連関へと巻き込まれていった西洋的思惟

の歴史であり，これに対してハイデガーが提示する別の始元における思索とは，このような自らの志向的なあり方を自覚しそれに耐える思惟のありようを示している。「性起」において，「存在論的差異」は企投と被投の同時性を強調する仕方で捉え直される。そして「死への先駆」は，いっそう可能性を可能性として持ち堪える現存在のあり方として示される。ハイデガーにとって，現存在は可能性であり，それは拒みつつも自らを与える性起として本質現成する。ハイデガーは『存在と時間』で述べていた「可能性としての現象学」をさらに深めていったのである。

「問うこと」および「概念的に把握すること」の徹底化はフッサールによってなされたのであり，ハイデガーはこうした姿勢をフッサールから引き継いだ。このことは，ハイデガーとフッサールの問いが，志向的なあり方をしている自己自身の存在に対して責任をもつという課題を含んでいることからも見て取れる。両者にとって，哲学とは「自己省察」であったのであり，このような「自己省察」が「人間性に対する責任」を負うことの条件となるものであった。ハイデガーの存在の問いは，フッサールの現象学なしには決して成り立ち得なかったのである。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文が明らかにしようと企てていることは二つある。一つは，ハイデガーの存在の思惟が一貫してフッサール現象学の影響下にあり，ハイデガーの存在の問いはフッサールの現象学なしには成立し得なかったということである。もう一つは，その現象学的方法の解明を通して，ハイデガーが存在の問いとして問うた事柄そのものを解明することである。この二つのことを論者は，切り離すことのできない結びつきにおいて描き出そうとする。両者の結びつきは，ハイデガーの思惟における存在論と現象学との結びつきに他ならず，まさにその両者の不可分の関係そのものが本論文の主題である。

そして，この主題をめぐる論考を導くのは，あくまで現象学の解明の方である。それ故，論者がまず行うのは，ハイデガーがフッサールの影響を受けて自らの現象学の方法を確立した初期フライブルク時代の講義録を詳しく検討することである。初期フライブルク時代のハイデガー研究は近年著しく進展したが，それらの多くは，1927年公刊の『存在と時間』におけるハイデガー独自の哲学的立場の確立に至る思想形成史という性格をもつものであり，自ずから文献学的研究の精密化に終始する傾向にある。そのような傾向に対して本論文の特徴は，そのような文献学的研究を基礎におきながらも，ハイデガーの方法概念とフッサール現象学の概念との相似性に照準を合わせ，ハイデガー哲学の方法的特質に肉薄しようとしている点にある。

そのようなやり方をとったことにより，論者は「形式的告示」という方法が何を指し示すかということを鮮明に提示するのに成功している。このことは本論文の特筆すべき成果である。「形式的告示」は初期フライブルク時代の講義録が公刊されたことによって，研究者たちに大いに注目されるようになった方法概念である。それは講義録のなかにしばしば登場し，ハイデガーがこだわり続けた重要な概念であることは明らかであるものの，その記述は錯綜し矛盾に満ちており，ハイデガーが試行錯誤した道程を表すに留まっている。論者は，この方法をハイデガーが考え出す哲学的問題連関から考察し，さらにフッサールの「形相的還元」や「偶因的表現」「志向性」などの理解を手掛りとして解明する。そして「形式的告示」が「関係意味」「内実意味」「遂行意味」の三つの意味方向から成っており，内実的なものを未規定にしたまま，示された形式を遂行することによって，意味を問う者において個別的な意味を現れ出させようとする方法であることを明らかにしている。

そして論者は，この「形式的告示」が『存在と時間』のなかで，表立たないながらも重要な役割を果たしていることを明らかにする。即ち，そこにおいて「存在の問い」は，「関係意味」としての「世界 - 内 - 存在」に即して，問いを遂行することそのものである「遂行意味」が働くことによって，最初は空虚であった「実存の理念」および「存在一般の理念」が次第に充実されていくという仕方で問われているというのである。

「形式的告示」をめぐるこれらの明晰な論考は高く評価できる。

さらに本論文の興味深い点は，形式的告示および現象学的解釈学という方法概念を導きとして諸著作を読解することによって，ハイデガーの哲学的営みとフッサールの哲学的営みとの近さが際立ったことである。論者は，ハイデガーの現象学とフッサールの現象学との関係においては差異よりも相似性の方が重要であると考えて，相似性を手掛りにしてハイデガーの存在の問いにおける現象学を追究している。それによって，「問うこと」および「概念的に把握すること」の徹底化がフッサールからハイデガーに引き継がれたこと，フッサールにおいてもハイデガーにおいても哲学とは「自己省察」であり，こ

のような「自己省察」が「人間性に対する責任」を負うことの条件となったことを，結論として引き出した。この結論はまったく新しいものというわけではないが，ハイデガーの存在の問いの一つの側面をクローズアップする性格をもっており，そのクローズアップのなかでハイデガーの存在の思惟は倫理的な色彩を強く帯びたものとして描き出された。これによって論者はハイデガーの存在論について自らの解釈の方向を確立しており，今後の展開の可能性が大いに期待できる。

論者の企図は本論文においておおむね成功しており，優れた成果を挙げている。難解なハイデガーの論述を丁寧に読み解き，行き届いた理解を示している。第一章から第七章までの初期フライブルク時代から『存在と時間』に至るまでの論考および『存在と時間』をめぐる論考は，充実している。ただし，それに比べて，第八章の『哲学への寄与』をめぐる論考は十分に論じ尽くされているとはいえない。ハイデガーの後期思想と現象学との関係は，もっと多角的に考察される必要があろう。また，考察がやや単調に流れ，現象学についての概念の掘り下げが不十分な箇所が見受けられる。しかし，これらの問題点を考慮しても，本論文の意義は損なわれるものではない。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，2006年12月13日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果，合格と認めた。